



『「旅」の意味と可能性を探る』(CD書籍)

廻 洋子 (淑徳大学教授 [当時])・家田 仁 (政策研究大学院大学教授) 編著
「旅の意味と可能性を探る研究会」著
2017年1月 東京大学 交通・都市・国土学研究室 刊
ISBN 978-4-9908895-2-4



近年訪日観光の急発展に伴い観光にスポットライトが当たっている。政府は国を挙げて観光をわが国の基幹産業へ成長させると意気込み、多くの地域も観光を目玉とした地方創生政策を推進し、経済効果に大きな期待を寄せる。

一方最近の若者は旅をしなくなったと言われて久しい。しかし1970年代から80年代にかけては、未来を探しにひとり旅立ち、世界を放浪する若者も少なくなかった。旅のもたらす未知の世界、発見の労苦や失敗の後に訪れる感動は若者の視野を広げ、タフな人間に成長させていった。当時、旅は若者の心をつかんでいた。当時、旅は若者の心をつかんでいた。当時、旅は若者の心をつかんでいた。当時、旅は若者の心をつかんでいた。

ひとはなぜ旅をするのだろうか、旅はひとに何をもたらすのだろうか。この古くて新しいテーマに取り組み、旅の本質・原点に迫る試みをしたのが本書である。今日、観光研究には多くの研究者が携わっており、観光統計や経済分析、需要動向、観光関連産業研究、観光地や観光資源等観光対象の調査、景観設計など様々な研究活動が活発に行われている。しかし本来、旅は人間ならではの本源的欲求に基づくものであり、その欲求は個人的であり、本人のおかれた状況や世の中の移り変わりによって変容するものである。また観光対象も魅力的であることは、個人的であることと表裏一体である。従って観光の研究に一定の貢献はするものの、旅や観光の普遍性を追求することには限界

がある。「ひとはなぜ旅をするのか、旅はひとに何をもたらすのか」といった旅の本質・原点に迫る研究にこそ普遍性を見出せるのではないか。

本書は4章から構成され、先述の問題意識から20人の識者が様々なテーマを通して「旅の本質・原点」にアプローチを試みたものである。第1章は旅の人づくり効果や日本人の旅と参詣等をテーマにした「旅の本質を探る」、第2章は休暇、宿泊、移動等を通し「旅を読み解く」、第3章は旅をする人々に焦点をあてた「旅する人たち」、第4章は「旅のコンテンツとインフラを作る」となっている。第3章には「39人の旅人たち」と題するコラムが加えられてあり、植村直己、宮本常一、

岡本太郎、ジャック・ケルアック、そしてモーツァルトまで、挑戦型、放浪と模索型、未知探求型、のんびり型、創造型等様々なタイプの「旅人」による古今の名著が紹介されており、読者は時空を超えて旅をした気分が味わえるだろう。

旅の本質・原点に迫り、前述の問いに完全に答えるには継続した追求が必要であるが、旅のあり方・旅の本質を考えるひとつのきっかけになる書籍といえるだろう。(あ)

お問い合わせ先
政策研究大学院大学 家田仁教授室
メール: m-kukita@grips.ac.jp
電話: 03-6439-6213

目次	
第1章 旅の本質を探る	
1.1 旅の本質を探る	～人づくり効果・幻影化・そして再発見～ 家田 仁
1.2 お伊勢参りと式年遷宮から日本人の旅を考える	梅川智也
1.3 ディスカバー・ジャパン・キャンペーンの対象と視点	十代田朗
1.4 バカンスの本質を考える	廻 洋子
1.5 観光的価値の増減と観光地の盛衰	安島博幸
第2章 旅を読み解く	
2.1 日本人と休暇	矢ヶ崎紀子
2.2 旅館の「本質」を探る	～日本ならではの宿泊文化の魅力～ 大久保あかね
2.3 移動から旅を読み解く～欧米と日本の近代まで～	清水哲夫
2.4 商人の旅と信仰の旅～山形を例に～	後藤靖子
2.5 案内記から読み解く日本の旅	楓 千里
2.6 旅と詩～東西の詩人による響き合う旅情(ポエム)～	上村多恵子
第3章 旅する人たち	
3.1 グランドツアー～21世紀の日本人はどこに学ぶか～	朝倉はるみ
3.2 旅の視点から比較するロシア人と日本人	鳩山紀一郎
3.3 旅へといざなう人々～まち歩きの人々～	青木真美
特別コラム「39人の旅人たち」	大串葉子(編集)
第4章 旅のコンテンツとインフラを作る	
4.1 景観と歴史まちづくり～個別計画から地域計画へ～	池邊このみ
4.2 国立公園～自然風景への旅	下村彰男
4.3 新リゾートの潮流	小松稔男
4.4 クルーズの旅	関川由津子
4.5 ワインを学ぶ旅・味わう旅	名須川ミサコ
4.6 旅と宿 日本の宿泊施設のあり方	奥 直子
おわりに	梅川智也

当財団からのお知らせ

●「旅の図書館」が国連世界観光機関 (UNWTO) の寄託図書館になりました

旅の図書館では、以前より国際観光の動向を把握する文献として、国連世界観光機関 (UNWTO) の刊行物を収集してまいりましたが、よりそれらの資料の充実を図ることを目的として「寄託図書館」に申請し、認定されました。

「寄託図書館」とは、高度な教育機関または科学の分野で認知された機関に属していること、UNWTOの刊行物を収集し、広く公開する図書館であることといった、一定の基準のもとに認定されるものです。

これにより当館では、「Yearbook of Tourism Statistics」などの主要統計の他、特定テーマに関するレポート類を充実させてまいります。ぜひご活用ください。

公益財団法人 日本交通公社 出版物のご案内



平成28年度 観光地経営講座 講義録 (発行:2017年3月)

講義録としては3冊目となる本書では、我が国の観光地の基本的かつ長年の課題である「滞在化」に焦点を当てています。「滞在化」は地域特性によって多様な形態があり、地域側に求められる対応策もさまざま。本書では、全国各地の多様な課題認識に応えられるよう、スキーリゾート (倶知安町)、高原リゾート (軽井沢町)、温泉地 (別府市)、まちなかの空き家の活用 (尾道市) という4つの事例を取り上げ、現場での実践者と学識研究者の双方を講師にお招きし、解説していただいています。A4判74ページ/本体価格1,000円。

「研究員コラム」の紹介

ホームページ (<https://www.jtb.or.jp/>) で、よく読まれているページのひとつが「研究員コラム」です。当財団の研究員ならではの「視点」をご一読ください。毎週月曜日に更新しています。

理想の専門図書館像を追い求めて [vol.331] 大隅一志



「旅の図書館」は昨年10月3日にリニューアル開館し、約3ヶ月が経過しました。この機会に、約3年にわたる図書館リニューアルの背景とその取り組みの歩みを簡単に振り返ってみたいと思います。

訪日団体旅行客は日本のどこで何をしているのか? [vol.332] 柿島あかね



訪日外国人旅行者数は2016年には過去最高の2,404万人に。そこで疑問に思うのは、彼らが日本のどこで何をしているかです。本コラムでは、団体ツアー利用率が高い台湾、香港、中国の団体旅行商品を対象とした「JTBF訪日旅行商品調査」の分析結果の一部を、雑感とともにお伝えしたいと思います。

“不便な”旅のおもしろさ [vol.333] 門脇茉海



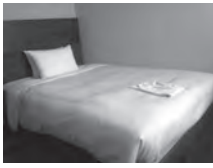
運転免許証を持っていない私は、まちなかの移動となると路線バス。バスは様々な出会いのきっかけでもあります。バスを待ちながら地元のおじいちゃんとおしゃべりしたり、同じ運転手さんのバスに偶然3回も乗ってすっかり顔なじみになったり。そんなバスにまつわる思い出のなかでも、特に印象的だったのが長崎県島原での出会いです。

外国人の訪日旅行頻度はどのくらい? [vol.334] 川口明子



2014年以降の訪日外客数の伸びは目を見張るものがあります。しかし、韓国や台湾、香港といった、訪日リピーター比率が高い、既に成熟期を迎えていた国・地域からの訪日外客数がさらにこれほど伸びるとは、10年前には思いもよりませんでした。こうした動きを目の当たりにして、一つ知りたいことが出てきました。それは「訪日旅行頻度」です。

民泊の実態を把握する [vol.335] 川村竜之介



昨年11月、ベネチアで開催されたOECD主催のグローバル観光統計フォーラムで、特に関心が高かったのが「MEASURING THE SHARING ECONOMY」と題されたセッションでした。民泊やシェアライドなどのシェアリングエコノミーの実態や影響を、いかに把握するかがテーマです。特に民泊については、法令上の問題や、既存の宿泊施設との不公平性、家賃の上昇など負の影響が指摘されており、その実態を明らかにすることは喫緊の課題です。

フィリピンの観光政策と観光研究 [vol.336] 菅野正洋



アジアの観光研究に関する自主事業の一環として、1月27日(金)に「フィリピンの観光政策と観光研究に関する勉強会」を開催しました。当日はフィリピン大学のDr. Edieser De La Santaをお招きし、講演と活発なディスカッションが行われました。今回は講演やディスカッションの内容の一部について、要約してご紹介したいと思います。

増える一人旅の背景とこれから [vol.337] 久保田美穂子



一人旅に関する研究論文やコラムを執筆してきた縁で、これまでも新聞社等から取材を受ける機会があったが、ここへきて再び問い合わせが増えている。一人参加を積極的に歓迎するパッケージ商品が目立つようになってきたからだろう。一人で参加するなら追加料金、が常識だった海外パッケージツアーの世界も変化してきた。

自国の観光資源への評価は甘い? 厳しい? [vol.338] 五木田玲子



日本、中国、フランスの3カ国について、TripAdvisor上で各国の観光資源の上位に表示される2つ、計6つの観光資源を抽出し、3カ国の公用語となっている3言語(日本語、中国語(簡体字)、フランス語)による評価を見てみることにしました。いずれの観光資源も、自国の人からの評価が最も厳しい、という結果となったのです。

まちづくりと観光事業の間にある壁⑦ [vol.339] 後藤健太郎



地域住民が足元にある資源を磨いて観光振興に活かしていく。また、地域経済の活性化の視点から、外からの観光客の来訪を通じて観光消費を地域に取り込んでいくなど、地域によってその目的もそしてそれに対応する戦略も様々です。ただ、“地域”で観光の方向性を議論する時、忘れがちなのが「観光は双方向である」ということかなと思っています。

高まる自動運転へのニーズ [vol.340] 塩谷英生



2月中旬に自主研究の一環として「自動運転へのニーズに関する消費者調査」を実施することができた(全国20歳以上対象。1次調査約1万名、2次調査約1,200名)。実はまだデータのクリーニングが済んでいない段階であるが、1次調査結果のポイントを少しだけ紹介したい。

旅立ちの日を前に [vol.341] 清水雄一



「旅の図書館」では、観光文化231号で特集した「旅心を誘う、旅の本のレジェンド30選」のコーナーを期間限定で設置している。書棚には、レヴィ=ストロース『悲しき熱帯』、沢木耕太郎『深夜特急』、藤原新也『印度放浪』、金子光晴『どくろ杯』等々、その背表紙を見るだけで、心がザワザワと波打つ作品が並んでいる。「人はなぜ旅に出るのか」。使い古されたこのテーマに関して書いてみる。